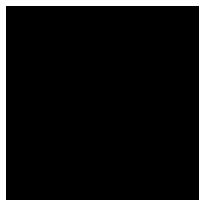


震災と私

—自分の夢を見つめ直したお話—



君塚 直人

(コミュニティ政策学科 2015 年卒業)

突然ですが、皆さんに夢はありますか。将来こうして生きていきたい、ああなってみたいという想いは、誰もほんやりとは考えたことがあると思います。今回は、私がコミュニティ福祉学部での学生生活を通じて、自分の夢について考えたお話をお伝えできればと思います。

私がコミュニティ福祉学部に入學したのは、2011年。東日本大震災の年です。私にとって東北地方は、祖父が福島市に住んでいたこともあって、小さい頃から馴染みの場所もあり、日を追うごとに明らかになる現地の惨状にとてもショックを受けていました。

大学も入学式の中止や授業開始の延期を経て、混乱の中でスタート。ボランティア活動が始まる頃になると「僕も力になりたい」という想いは自然に湧いてきましたが、大学1年生の僕はそれに対するアクセス手段も分からず、半ば諦めたような想いを抱いていました。

震災の年の12月、そんな私の悶々とした想いを救ってくださったのが、当時所属していたゼミの教授です。コミュニティ福祉学部の復興支援推進室による、宮城県の離島・気仙沼大島における子どもたちの学習支援活動をご紹介いただきました。活動は月に1度実施されており、私はその後卒業に至るまで、この活動に継続的に参加していくこととなります。大島での活動は、震災の影響で学校が一時止まってしまった子どもたちへの学習支援をメインに、現地の方々と多岐に渡る交流を持ちました。その中で、その後自分の人生に影響を与えることになる、とても印象的な場面がありました。

ある中学生の隣で勉強を教えている際、その子が突然、僕に将来の夢を語ってくれました。まずは、継続して活動に参加してきた中で、その子が僕に将来のことを話してくれる関係性が築けたことがとても嬉しかったと同時に、その子は自身の環境を大きく変えたであろう災害を経験してから日が浅いにも関わらず、自分の将来をしっかりと考えていることに大きな衝撃を受けたのです。仮に私が同じような災害を経験し、その環境

にいたとしたら、同じように将来を考えられたらどうか？ じゃあ、僕の夢って何だっけ？ この経験は強い感動と衝撃を生み、僕の胸の片隅に、ずっと残ることになります。

時は経ち、就職活動の時期になりました。当時のエントリー企業リストを見ると、不動産や金融業の会社名が並ぶ中で、異端なグループがありました。鉄道会社です。僕はいわゆる「鉄ちゃん」で、小さい頃は鉄道会社で働くことに憧れており、小学校の卒業文集にもそう記していました。一方で、大人になるにつれて様々な現実を知るようになると、勤務形態や賃金水準など、現実的なことが気になってきます。しかし、それでも鉄道会社の現業採用を受けていたということは、自分の夢がどこかで諦めきれなかった表れでした。

結局、両親がかつて銀行員だったこともあり、選考が早かった金融機関に勤めることになりましたが、なかなかモチベーションが上がらない日々が続いていました。2年目の春、熊本地震が発生。テレビやネットから再び次々と地震の惨状が飛び込んでくる中、私は東日本大震災のことを思い出して色々と考えを巡らせていました。あの日、中学生の子が語ってくれたように、僕が人に語れる自分の夢は鉄道員になることじゃないのか。同時に、東北で耳にした、震災によって多くの日常が突然失われた話を思い出します。今挑戦しないと次の機会があるか分からない。私は意を決して、小さい頃に憧れていた鉄道会社の現業職への転職を決めました。

そして現在、私は都内のある鉄道会社で勤務しています。今年、入社5年目で国家資格である電車の運転免許を取得し、この8月から夢の電車運転士になりました。結果として、僕の転職は正解でした。今の仕事も、前職以上に厳しい経験をたくさんしていますが、それでも心が折れないのは、やはり自分が小さい頃から憧れてこの仕事に就いた強い気持ちがあるからだと思っています。進路を考えるうえで、夢について強い衝撃と意識を与えてくれた気仙沼大島での体験には本当に感謝しています。

これを読んでいる学生の皆さんも、今後進路に頭を悩ませる日が来る、あるいは、今その最中にいるかもしれません。私の、ほんの少し皆さんより人生を歩んだ経験から言えたことは、月並みですが、やりたいと思ったことを素直にやってみて良かったなということです。進路を選択するうえで、世の中ではいろんなものが邪魔をします。自分のプライド、親や周囲の声、その他…。そんな時は、純粹に「自分は何をしたいのか？」に正直になってみることで、私の場合は、今やりがいのある時間を過ごすことができます。

同時に、このコロナ禍の中で改めて思うのは、まだまだ長い人生、日常というのはい

つ変わってしまうか分からないということです。2年前の今頃は、この不自由で、時に不条理な世界になると誰が想像できたでしょうか。また報道では、連日のように豪雨災害の様子が映し出されます。やりたいことができるうち、挑戦できる環境があるうちではないと、次に「やっぱりこうしてみたい」と思ったときにはもうできないかもしれません。私の場合は、電車の乗務員になる夢を無事に叶えることができましたが、より安全な自動運転技術の発達や働き手の減少、そしてこのコロナ禍で、10年後に同じことを思っても電車乗務員という仕事自体がこの世から無くなっている可能性が高いのです。

そしてさいごに、コロナ禍が落ち着いたら、僕の大好きな気仙沼大島をぜひ訪れてみてください。木々の緑と海の青がとっても綺麗な、素敵なところですよ。島の良さを感じるとともに、10年を経てなお、物理的・精神的に残る震災の爪痕を感じて、「震災」についても考えていただければと思います。

今回は、ともに気仙沼大島の活動に参加し、コミュニティ政策学科の1年先輩である市野健太さんにお話を頂きます。